

千葉工業と共に

同窓会顧問 段木 正視 (20C)



県立千葉工業学校入学

昭和15年3月に九十九里浜のほぼ中央にある片貝町立片貝小学校を卒業した。

「これからは工業の時代です」と両親がクラス担任に説得されたのが、千葉工業への第一歩だ。4月、千葉県立千葉工業学校應用化学科に

入学。クラス担任は景山先生(第5代校長)であった。

1学期が終り成績通知表が渡された。順位は40人中何と33番。ビリの方だ。工業として、県下ひとつの学校だ。県下全域から優秀な者が集中する。九十九里浜の田舎者はこんな順位か。親も私もあきらめムードになってしまった。夏休みの終り頃盲腸炎となり、たちまち重篤。3時間余りの手術で命はとりとめたが、さらに2度手術を受けて小康を得た。漸く復学した4月、一学年下のクラスに編入された。落第である。大きなショックであった。一年下の連中にまけてなるものか。落第は強いバネになった。一学期が終って渡された通知表で4番になった。やればできるではないか。落第が私にチャンスくれたのだ。さらに上級学校への進学を目指した。往復5、6時間の汽車の中が受験勉強の部屋となった。

あの大きな戦争が日を逐って激しくなってきた。1週間に2、3日は種々の勤労働員で潰された。ついに4年生のとき船橋市にあった軍需工場に学徒動員になり、学校からひきはなされてしまった。あこがれに胸をふくませて入学した検見川校舎に登校できたのは、予行日と卒業式の二日だけであった。

昭和20年3月に卒業。7月7日の夜、千葉市が大空襲を受けてほとんど焼け尽くされたが、畠の中にぼつんとあった検見川校舎も焼夷弾攻撃を受けて無くなってしまった。

官立米沢工業専門学校入学

戦争のため4月の入学式は延期され、引き続いて軍需工場へ動員された。8月敗戦。9月入学式。身寄り一人いない東北の豪雪地帯で、学校の寮で生活することになった。これは人間関係の坩堝(るつぼ)であり私の人生の二度目の怒涛であった。

食べる物が無くて、寮生全員でイナゴやドングリを採ってコッパンに替えたこともあった。一晚吹雪くと翌朝は軒先の上まで雪が積もった。とにかく遅く生き抜いて高等教育の学問を身につけなければならなかった。今までの自分を鍛え直し、乗り越える努力を積むしかない。母や姉に「人が変わってしまった」。と言われた。

しかし、遠く離れてひとりになり、はじめて親の恩

を知り、姉弟の絆を感じる事ができたのである。

千葉工業学校の教員となる

昭和23年1月北村校長先生(卒業時の校長先生でもあり米沢工業専門学校の大先輩でもある)から、すぐ教壇に立つように言われ、学生でありながら教師となった。

昭和23年4月の学制改革によって、千葉工業学校は千葉県立千葉工業高等学校となり、私は正式の教諭に任命された。7年後、県立東金高校定時制に異動した。

その後は千葉県高等学校教職員組合中央執行委員・東金商・山武農・成東高の教員さらに、教育行政の道を経験した。

国府台高校長へ

昭和53年4月着任。市川地区の中心高だけあって優秀な職員、生徒が多かった。

母校千葉工業高校長へ

昭和57年4月着任。生徒の時の先生が二人、怖い先輩が三人、同級生一人、後輩数名、少々重い心を抱いて赴任したのだが、皆、私を支えてくれた。有難いことである。

五十周年記念行事は一週間授業を止めて実施した。二度火災に遭い、三度移転したので重要書類の多くは消失したり紛失してしまって「校史」に値する物が無かった。2年先輩の化学科の先生に校史の編纂を依頼した。先生を中心とした強力メンバーが全力を傾けて「五十年」と題した校史をまとめてくれた。

また種目毎にばらばらに行われていた技術コンクールも全県統一して実施し、新聞やテレビでも報道された。千葉県工業教育研究会の会長をしていた私は、各種目の最優秀者に知事賞を出して頂くように、当時の沼田知事さんに直接お会いして実現した。

知事賞を出して頂くことを当時の県教育長さんに報告したところ県教育長賞も出して頂くことになった。千工研の方々の努力で現在も続いていることは嬉しいことである。

昭和63年3月に定年退職した。40年の長い教職の幕を閉じることができた。

同窓会顧問

定年退職して千葉工業高校と縁が切れたわけではなかった。顧問として毎年の同窓祭、各支部の総会、懇親会には事情の許す限り出席させてもらっている。ここでは教え子とも会える。嬉しいことである。十三歳から八十九歳までの千葉工業と共にあった長い道程(みちのり)は私の誇りでもある。

千葉工業今昔

親子三代 千工卒業生

牧(宮崎) 弥香 (H8IE)



祖父(恒雄 18C)



父(一雄 42C)



筆者(弥香 H8IE)

千葉工業今昔

私が千葉工業高校を卒業して、早20年になります。入学当時、祖父(恒雄 18C)、父(一雄 42C)も千工卒業生だったこともあり珍しがられ「親子三代千工生」という言葉が常に付いてまわるようになりました。そんなわけで、機会あるごとに初対面の大先輩からも「あの親子三代の・・・」と親しく話かけていただいたものです。

さて、母校が創立80周年を迎える今年、せっかく機会をいただきましたので、私が祖父、父から聞いた千工の思い出を少し書いてみたいと思います。

千工は昭和14年に市立から県に移管され、その後検見川、津田沼、生実と校舎が移り校歌も変わり現在に至っています。祖父が入学したのは千工が県立としてスタートした昭和14年、寒川にあった校舎が焼失し、入学式やその年の9月までの授業は現在の千葉市立末広中学校のある場所で行われたそうです。その後検見川校舎に移って本格的な学生生活が始まりましたが、時代は戦争へと向かい、繰り上げ卒業となったようです。

父は祖父や千工卒業生であった当時の中学校の担任の影響で千工へ進んだようです。校舎は津田沼に移っており、千葉市更科町の片田舎からの通学で見る物すべてが新しく、急に視野が広がった思いだったようです。実習中いたずらをしたこともあるよう

ですが、とにかく実習は楽しく、通学の大変さもなんのその。試験の時、大雪で千葉駅まで近所の仲間と4時間かけて歩いたことも懐かしい思い出のひとつだそうです。また、祖父がお世話になった先生がまだ多数在籍していらしたことも、父にとって千工がより身近に感じられたのかもしれない。

そして私、祖父、父は自分の母校を選んでくれたと喜んでくれました。「行くのは私だから」と反対する母を説得し、生実の坂をのぼり入学式を迎えたその日は校庭の桜が満開でした。

生徒会に携わり、千葉県主催の高校生海外研修で東南アジアへの研修に参加させていただいたり、初代女性生徒会長として活動する機会も得ました。私の高校生活は勉強より生徒会活動の3年間と言っても過言ではありません。先生方をはじめ仲間にも恵まれ、本当に楽しい日々でした。

時代の背景とともに母校の校舎も移転しました。我が家にも戦時中に学生時代をすごした祖父の千工は検見川、高度成長期の父の千工は津田沼、そして平和な時代の私の千工は生実と三つの千工があります。しかし同じ千工で学んだ「親子三代千工卒業生」、今は亡き祖父から検見川の思い出を聞くことはもうできませんが、折りにふれ父娘でそれぞれの千工の思い出話ができればいいと思います。

千葉工に聖火がともった体育祭

金子 衛 (38M)



昭和37年9月30日、津田沼の千葉工グラウンドに聖火が真っ赤な炎を上げました。

昭和37年9月30日、津田沼の千葉工グラウンドにこれまで、文化祭は多くの来場者があり大変盛況でした。その一方で体育祭はもう一つ盛り上がり欠けていました。そこで我々生徒会は「体育祭成功の対策」を種々考えましたが、その一つとして聖火リレーを行い、グラウンドに設置した聖火台に聖火をともし、大会の雰囲気盛り上げようということになりました。以下にその様子につき報告させていただきます。

我が母校は、ご承知の通り寒川⇒検見川⇒津田沼と変遷を続けていました。我々生徒会は、母校発祥の地・寒川で聖火を採火し、体育祭当日に聖火台に点火することを企画しました。

寒川大橋での採火には古矢勝副会長と伊藤昭治書記が臨みました。トーチに市原市牛久在住の伊藤君が採って来てくれた松ヤニを塗り、レンズを使って太陽から採火するという本格的なものです。正午にこのト

ーチを最初のランナーである山中圭介バスケットボール部長が高々と掲げ、聖火リレーがスタートしました。伴走は母校のトラックで自動車部に運転をお願いしました。

聖火はその後、部活の運動部のキャプテン8名がリレーし、県庁前_椿森陸橋_穴川十字路_検見川の母校跡_実籾十字路_大久保十字路を經由し、体育祭前日の15時に津田沼の校舎正門に到着しました。この日はアルコールランプに火を移し、生徒会役員室で役員と一緒に一泊しました。

体育祭当日の朝、生徒全員が整列して行われた開会式のセレモニーの最後に、高杉利子(現姓・早邊利子)放送委員の声で、「只今から聖火が入場します。この聖火は寒川で採火し、検見川を經由して運ばれてきました。そして今最終ランナーである陸上部キャプテンの飯嶋さんによりグラウンドを一周しています。皆さん、フィールドの聖火台にご注目下さい。聖火の点火です」と放送されたことを、今でもはっきりと記憶しています。そして点火された瞬間、このことを知らされていなかった生徒達から「ウォー!」という感嘆の声が上がり、この瞬間から体育祭モードにも火が付きました。

今から思うと、何故国道を含む公道を火をかざして走れたのか、大いなる疑問です。当然警察への届け出が必要だったと思いますが、生徒会として警察への届け出は一切していませんでした。恐らく生徒会顧問の藤本先生が手続きをしてくれたのかと思いますが、今では考えられないことだと思っています。

集会委員長

松本 信行 (34M)

集会委員長と聞いて、大声の恐ろしい男と言う印象を持つ卒業生は、年配の方々であろう。近年の千葉工業高校には、こんな仕事をする生徒は無いと聞く。

集会委員長とは、全校の生徒集会を開催、推進する委員長であり、選出方法は、歴代委員長の(前年度)独断での推薦で決定されていた。

昭和34年度の集会委員長を務めたが(57年前)、前年度は野球部の主将が、前々年度柔道部の部長が務めた。小生も柔道部の副部長でありました。

毎年、集会委員長を何故、運動部の猛者が務めたかと云えば、全校生徒約800人を、大講堂に集め、スムーズに集会を取り仕切る事であった。

当日の朝、会場に800人分の長椅子並べる指揮を取

る、この作業はほとんど一年生が駆り出された。演壇を準備して、集会に入る。

議事進行中は、静粛に進行させる、時には「静かにしろ」と大声で怒鳴り、大講堂をシーンと静かにさせた事もある。後片付けはほっとしてか、あまり記憶に無い。

集会委員長は運動部の猛者が成ると思われるけれども、現在振り返って見れば、歴代の委員長は心優しい生徒だったと思います。学校全体の生徒集会を進行、推進するための蛮行もあっただろう。

一年間、つつがなく集会委員長を務められたのは、全校生徒のお陰で有り、誇りでも有りました。

ちょっとした思い出！！

小林(織田澤)迪子 (34C)

創立80周年おめでとうございます。私は昭和31年に千葉工業高校化学科に入学いたしました。

夜間部には、既に女子生徒は在学していましたが、昼間部では初めての女子と言う事で、何かと騒がれて居りました様ですが、幸い私の家は学校から15分以内の所にありましたので、通学は何時も一人でしたから、私の耳には何も入って来ませんでした。

一つ気を付けていました事は、何をしましても目立ちますので、学校の恥にならないようにと言う事です。

高2の年に女子が一人入学しました。その年の秋に創立20周年記念式典がありまして、校門の前に杉の葉で飾ったアーチをご逝去されました飯田忠蔵先生のご指導の下で、C2Bが造った事を覚えております。当日は、プラスバンドが津田沼駅まで行進して駅前で2、3曲演奏しました。その行進の先導を1年生の故伊藤米子さんと私が務めました。二人とも恥ずかしさに俯いて歩いておりました事を懐かしく思い出しております。(米子さんは平成26年5月に他界されましたそうです。職場も同じでした)

高3の年にまた一人女子が入学し、先の二人にはキツネとタヌキのニックネームがあり、次はムジナと言



われ3人娘は納得して(?)笑い合いました。

保健室の思い出と言いますと、私が入学して困った事がありました。一学期は兵舎の教室だったのですが、お昼になり手洗いをすませて教室に戻りますと、もう級友はお弁当を食べ終え、楽しそうに遊んでいて、室内は埃が酷く私はお弁当が食べられなくなって、次第に頬がこけてしまい、これではいけないと思って保健室に伺いました。ご逝去なされました佐々木カツエ先生が暖かく迎えて下さり、それから卒業するまで一人また一人と仲間が増え、先生との楽しいお昼の時間となりました。

女子の施設は何もありませんでしたが、保健室は体操の前後の更衣室であり、また三人娘が気軽に過ごせ

る居間でもありません。何時も佐々木先生が優しく見守って下さいました。そうもう一つ、先生は、何時も私達を名前で呼んで下さいました。きっと「男子校に入っても、あなた達は女の子なのですよ」と言って下さっていらしたのかと……。

蛇足になりますが、千葉工業高校

時代からの私は、血液が薄く赤インキの3分の1の濃さと言われ、造血剤を飲みながら生活していました。時には貧血を起こして、皆さんに心配をお掛けしました事も思い出の一つです。



前列左が筆者、
右は高嶋英子さん、
後列左は伊藤米子さん、
右は佐々木カツエ先生

津田沼校舎の事を少し



◀現在の津田沼の
地図



◀イトーヨーカドー
津田沼店と記念碑

戦後、鉄道連隊の跡地北側に千葉工業高校、南側に千葉工業大学と習志野第一中学がありました。千葉工業高校が生実に移りました。習一中も西側の船橋寄りに移り、千葉工大のみ形をかえ元の場所に残り、運動場と幾つかの施設は、埋め立て地の茜浜に移ったようです。習一中の後には習志野文化ホールや「もりしあ」が出来、懐かしの千葉工業高校の跡地にはイトーヨーカドーが建ちました。ヨーカドーの南側道路を挟んで公園があり、その津田沼校舎跡地に記念碑が創立60周年記念行事で建立されました。

十六歳の頃

古川(高木)千枝子(38C) (女子会“レディス・ビオラ”代表)

薄い雲が北東の空へと伸びて、台地の雑木林へのみ込まれてゆきます。雑獲物を探しているのでしょうか、一羽の沢鷺^{ちゅうび}が滑るように飛んでおります晩秋の佐倉の里です。

ここを住まいにして50年、日々の生活環境は少し変わりましたが、大きな自然環境は悠々として変わらず、人々の歴史を包み込んでいます。古印旛沼と名付けられた頃の人々の豊かな暮らしから続く今、様々な歴史を乗り越えてきた「北総地域」は大好きな里になりました。

朝の仕事が一段落ついた後、何気なく見ていた「NHKテレビ・おはようっぼん」に筑波大学名誉教授・勝田茂氏が登場され「高齢者スポーツのすすめ・効果」を話して居られました。見ているうち、聞いているうちに「高1の体育(柔道)の先生が勝田先生」だった事を思い出しました。似て居られることに気づきました。「話し方、声の調子、お変わりにならない…」そんな思いが拭えず、同窓会名簿やネット検索などして見ました。だんだん確信に変わりました。

私達が3年になる時、勝田先生は「大学に戻られる」と告げられたことを覚えています。

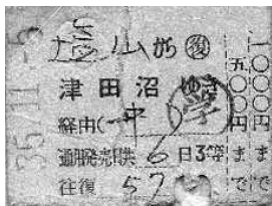
「そうなんだ、あの勝田先生、お元気でご活躍なのだ…」

とても嬉しく、あの頃のさまざまな思い出が浮かんできました。

「柔道の授業」、私にとってイヤな時間でした。先生も困られたと思いますが、授業以外での楽しい思い出があります。体育祭のフォークダンスや山登り。

山岳部の方々と一緒に行った「大菩薩峠」、勝田先生や長谷川先生も参加されました。母の持っていたアルバムに写真が残っていました。初めてづくしの山行でした。

☆初めての夜行列車 ☆夜中まで
人並みの絶えない新宿駅前広場
☆山登り



女子生徒は江成、織田澤、小関、田中、高木です。暗闇の登山道を上り、一息ついたところで食べた半分ずつのインスタントラーメンの美味さと温かさは、今でも時々思い出します。

もう一つの思い出は、何とも素直ではない私です。この頃、父が体調を崩し数か月入院という事態になりました。紳士服縫製の仕事をしておりました。学費の納入も困難、早速「奨学金」を申し込む等、担任の田久保先生にお世話になりました。更に「定時制の職員室」のお茶汲みをお世話戴き、昼間の授業終了後は、アルバイトをしました。定時制の給食終了時間までの仕事です。その帰り路でした。

当時の千葉工業高校は津田沼。校門を入ると砂利道が続き、両側に小振りの松並木が柔道場や吹奏楽部部室から剣道場の辺りまで続いていました。夜になると裸電球の街灯と用務員さん一家の暮らす家の灯りが松の葉を透してぼんやりと見える夜道です。

冬の帰り路でした。長くて重いオーバーコートと布靴を提げて歩いている時「重そうだね」と話しかける方がありました。うす暗い街灯の灯りではっきりとは見えませんが、定時制の高学年の方と思いました。

「ラーメンでも食べようよ」と誘われ店に入りました。食べながらご自分の家族のことなど話されましたが、私は素直な気持ちになれず、生意気なことを言った気がします。一度きりだからと、互いの名を告げる事もなく別れました。その方も矢張り重そうなオーバーコートを着ていました。父の得意としていたバルマンカラー(衿の種類)でした。

卒業から50数年、思い出すことと思いだせない事が渦巻いていて、ふわっとひとつひとつが浮かび上がる——楽しい年頃です。



写真の私は穏やかな顔をしています

千葉工業今昔

通学時の思い出

房総西線 上総湊駅～津田沼駅

村田 敏夫 (29E)



千葉工業電気科に昭和26年入学。千葉県君津郡湊町(現在の富津市)生まれ、当時の津田沼校舎への通学は往復4時間強の道のりであった。朝5時過ぎNHKラジオ「早起鳥」(注)を聞きながら、冬季は星あかりを頼りに家を出た。房総西線(現在の内房線)上総湊駅から千葉駅経由両国行き蒸気機関車に乗る。千葉駅で電車に乗り換え始業時間の1時間も早く着いてしまうが、次の列車では間に合わない。

平日は授業終了と同時に帰宅しても、家に着くのは夜の7時過ぎ。行きも帰りも星空を見ながらの通学だった。そのため3年間の学生生活は勉強もほどほど、部活など課外活動も必要最小限の参加。学校生活での思い出と言えば、旧機関車のレールが敷設されたままの教室での電気・機械実習と、放課後と体育の時間に行うグラウンドの石拾いぐらいだ。



電気科発明創作クラブ(昭和28年文化祭)

しかし土曜日は平日と少しパターンが変わる。午前中で授業が終ると、津田沼駅から上り電車で秋葉原の電気街に向かう。当時テレビなどは無くラジオ全盛時代。メーカー製品は高価だったので自分で部品を購入し、組み立てると半値以下で出来た。真空管式の「5球スーパーラジオ」と言えば高級品で一般家庭でも憧れの一品だった。目的のパーツを購入し、両国駅発館山行きの下り直通列車に乗る。夜8時過ぎ自宅に着いてから、徹夜で組立を始め日曜日の午前中には完成する。完成品は近所の人たちの口コミで数日中に完売し、次の材料費に当てる。

趣味と実益?の土・日パターンが終わり、月曜日からは「早起鳥」を聞きながら平日パターンに戻る。通学時間に翻弄され、鉄道マニアのジャンルで言う「乗り鉄」の様な3年間だった。



電気科発明創作クラブ(昭和28年優秀賞)

(注)かつてNHKラジオに「早起鳥」という番組があり、朝5時ニュースの後、ラジオ一日の始めを告げる番組であった。

房総東線 勝浦駅～津田沼駅

生貫 俊明 (38C)

房総東線(現在のJR外房線)の勝浦駅からの通学で昭和35年(1960)春から卒業の38年春までの3ヶ年通いました。

当時、国鉄の気動車で千葉駅(現在の東千葉駅)へ、それから国電で津田沼駅まで。その内容は毎朝5時起床、朝食を済ませ、自宅から自転車で国道128号線の砂利道を2.5Km、勝浦駅5時40分発、大網駅で列車はスイッチバックして土気の坂を登り、当時全国でも稀有の線路が行止りの千葉駅の0番線に7時40分に到着し電車に乗換えて津田沼駅まで17分、部室で着替えて教室に入ると、8時30分。朝食後5時間経つと腹が減り、一時限目の授業が終り9時半には弁当を半分食するのが習慣で午前中の授業が終わると残りの弁当とコッペパンで空腹を満たしました。

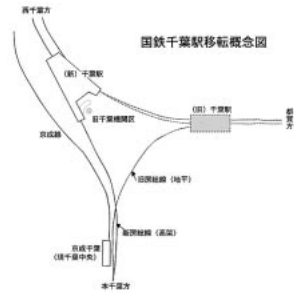
下校時は千葉駅前の栄町の書店に立ち寄り、千葉発17時



半の列車に乗るのが常で、時には18時40分発の両終(注)と言われたSL列車にも乗りました。

房総西線のホームの万葉軒の立食いそばを食べたり、御宿～勝浦間はトンネルが多く客車に煙が入り真っ黒になるので夏の登校日でも黒の学生服で通しました。従って一日24時間は、通学8時間、学校生活8時間、在宅時間8時間で、毎朝4時に起き朝飯と弁当を作ってくれた母に感謝でした。

(注)両終とは…朝4時勝浦発上り列車で、大部分が業者占有?鮮魚、闇米、野菜を行商する方々を乗せた蒸気機関車で、下りは両国駅を17時40分発で、千葉駅と大網駅で機関車は転車台で方向転回して客車をけん引する。両国発最終列車の事です。



JR内房線「アッ!! 電車の中だ」

浅野 真吾 (H14EM)



南総支部への入会希望と同時に、通学時の思い出をテーマに、同窓会報に寄稿して欲しいとのこと。とは言え、家からJR内房線巖根駅迄は自転車で10分、巖根駅から蘇我迄30分という通学時間の中では、印象に残っていることも余り無いが、何とか記憶の糸をたぐり寄せてみた。

千工在校時はサッカー部に所属、サッカーに明け暮れた3年間と言っても過言ではない。当時の千工は必ずしも強豪校ではなかったが、それでも練習は厳しいものがあった。全体練習は午後7時頃迄であったが、その後1時間程自主練習、「つぼくた商店」への寄り道と合わせると、帰宅は午後9時を回ることが多かった。また、週末は、ほぼ毎週のように練習試合が組まれており、休日を家で過ごしたという

記憶は殆どない。

そんなサッカー浸けの生活の中で(これは1年生のときのことであるが)、翌日の試合で使用するサッカーボールと救急箱を持ち帰ることになったが、家に着くとそれが無い。「アッ!!電車の中だ」気付いた時はもう遅い、幸い忘れ物は君津駅に保管されており事なきを得たが、一瞬頭の中が真っ白になったのは言う迄もない。それでも同じサッカー部の仲間には、内房線終点の安房鴨川駅迄忘れ物を取りに行った友達もおり、今思うと、電車の中は貴重な睡眠時間だったのかも知れない。

卒業後は1年程会社員生活を経験したものの、自立したいとの思いが強く、現在は、内装業を主体とした「総合インテリア真」を営んでいる。インテリア関係の仕事に興味がある在校生がいれば、インターンシップで受け入れます。是非一度経験してみてください。

野球部OB 関根浩史さん(55M)を訪ねて

伊藤 洋一 (56M特)



伊藤さん(左)と関根さん(右)

本校野球部OBで在校中に完全試合を達成し、千葉工に関根ありと謳われ、卒業と同時にノンプロの強豪日産自動車に進み、第27回アマチュア野球世界選手権大会の日本代表に選出され、1982年ドラフト2位で当時の大洋ホエールズに入団、エースとして活躍した。

特筆すべきは、日本プロ野球界でも今現在最後の完全試合男・元巨人の槇原投手と巨人戦で投手戦を演じ、2対0で常勝巨人を完封した球歴を持つ男。

そんな凄い選手が本校高野球部OBに居たことを、本校卒業生は勿論、在校生にも本校野球部の誇りとして知っていただければと思い、現在横浜市在住の関根さんを訪ねてインタビューして来ました。(以下敬称略)

伊藤 「野球を始めたのは何歳頃でしたか？」
関根 「小学校2年生でした。」
伊藤 「少年野球時代は何処のチームでしたか？」
関根 「星久喜イーグルスと言うチームで、小学5年から中学1年まではリトルリーグで硬式でした。その後、松が丘中では軟式でした。」

伊藤 「千葉工業高校に入学した理由は何でしたか？」
関根 「当時千葉県高校野球の名門高校と言われていた千葉商、木更津中央からもお誘いを受けたのですが、中学の1年先輩が千葉工野球部に居て、彼から誘われたこと、自宅から自転車で通学出来る位近かったからです。」
伊藤 「高校生活3年間で一番楽しかったことは何でしたか？」
関根 「機械科の同級生が皆で励ましてくれたことや、協力してくれたことでした。」
伊藤 「高校野球3年間で一番の思い出の試合はどの試合でしたか？」

関根 「勿論、千葉東との完全試合と、後は夏の甲子園県予選の3回戦で多古に1-2で負けた試合ですね。この時千葉工は関東大会に出たこともあって夏の大会では優勝候補の一角になっていましたからね。でも、18人入部した同級生も3年生は3人しか残っておらず、後は1・2年生のチームになっていましたが、下級生も一丸となって甲子園を目指していたんですが、1点差で負けてしまい今でも悔いの残る試合でした。」

伊藤 「社会人野球時代の思い出は？」
関根 「世界選手権に日本代表で出場できたことですね。韓国で開催され、アウェイでの試合で、2-2で私がサヨナラホームランを打たれて負けてしまいましたが、社会人野球時代の思い出ですね。」
伊藤 「ではプロ野球時代の思い出は？」
関根 「巨人戦に槇原投手と投げ合って2-0で完封勝利した試合と、当時の広島市民球場での広島戦のダブルヘッダーで、当時の古葉監督が、私の規定投球回数到達のために2試合共先発で起用してくれて、2試合共負けて、1日に2敗と言う今では到底出来ない珍記録を作ったことですかね。アハアハアハハ」
伊藤 「では最後に本校野球部の後輩たちに何か一言贈る言葉は？」
関根 「とにかく野球を楽しんでやって下さい。」
伊藤 「本日はご多用中にもかかわらず有難うございました。これからも野球の普及に頑張ってください。」

尚、関根さんは現在地元の横浜市で緑東シニアのコーチをしていて、彼の教え子には、横浜ベイスターズの筒香外野手や楽天イーグルスの松井投手らがプロで活躍している。

筆者の伊藤 洋一さん(56M特)の記事は同窓会報第23号に「特修1期生として」を掲載しています。



写真は千葉寺球場で市川高校戦

千葉工業今昔